



Title	共生を忘れた和人の詩
Author(s)	堺, 由香; 北原, モコットウナシ
Citation	アイヌ・先住民研究, 3, 161-171
Issue Date	2023-03-01
DOI	10.14943/Jais.3.161
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88328
Type	bulletin (article)
File Information	10_3_Sakai_Kitahara.pdf



[Instructions for use](#)

【時評】

共生を忘れた和人の詩

The poetry of a Japanese that lost the way of Coexistence

堺 由香*、北原モコットウナシ**

Yuka SAKAI, Mokottunas KITAHARA

はじめに

本稿で取り上げる書籍は、評者の1人である堺の知人について書かれたもので、著者は長年アイヌ民族に寄り添ってきたと評される和人男性である。本稿執筆の契機は、同書を読んだ際に堺が覚えた違和感である。そこを出発点に、数年をかけて堺が関連書籍を探索し、違和感の根源を辿ってきた。堺の指摘によって、本書にはアイヌと和人の関係に留まらず、女性と男性など、様々なマイノリティ性・マジョリティ性を越えて連携・共同しようとするときにつきまとう困難や問題が含まれていることが明らかとなった。したがってこの考察は、アイヌ・和人以外の非対称な関係における連携・共同を考える上でも参照すべき事例になると思われたことから、もう1人の評者北原が文章化を提案しここにまとめることとした。執筆における検討の結果、本稿は、後に述べる事情によって、書名も著者名も記さない型式をとることとした。以下、1と5を主に堺が、2～4を共同で、6、7を主に北原が執筆した。

1. 執筆の経緯

数年前、私が若い頃に親切にさせていただいた、ある「女性」の近況を知りたいと思いいろいろな人に聞いてみたが、近況を知る人がいなかった。

偶然、その「女性」の名前がタイトルに入っている本が出版されたことを知った。「女性」は、自分について書かれることを好まないタイプの人だと思っていたので、違和感を持ちながら読んでみた。その本の著者は、「女性」と長年同居していた和人で、本を読んだことで「女性」が亡くなっていること、著者とは生前に別れていたことを知った。「女性」は私の知る限り、アイヌであることを表明して活動していた人ではなかった。親しい人は「女性」の出自を知っていたけれども、自身がそのことを前面に出していたわけではない。

驚いたのは、「女性」の一人称で書かれている部分だった。しばらくして、新聞に掲載された著

* 少数民族懇談会

** 北海道大学アイヌ・先住民研究センター

者のインタビュー記事に「生前は自分のことを書かれるのをとても嫌がっていた」と答えている箇所があるのを見た（後述）。「女性」が嫌がっていたことを知りながら本名を出して書いていたことに衝撃を受けた。私の驚きや怒りは、単なる私個人の感想なのかと数年間悩んでいたが、その後、幾人かの知人と話す中で、同じような違和感を覚える人がいることを知り、単なる錯覚や思いこみではないと感じた。そこで、その詩集と、著者の複数の本、私が「女性」について知るいくつかのことから読み取ることのできる問題点について整理したいと思う。

このような文章を書くことで、書かれることを嫌がっていたという「女性」に再び言及することに悩んだが、一方で著者は一定の影響がある人物であり、本書がそのまま受け入れられるよりは、問題・違和感を指摘しておくことで、私なりの故人への追悼を示したいと考えた。「女性」の遺志への配慮として、書名や著者名など「女性」につながる情報は出さず、以下でも関係者を「女性」「著者」とのみ書き、文献については①、②など番号で表記することとした。

2. 民族性のアウトティング・性的暴露

著者は、別れた後に「女性」の実名を挙げて、民族性を含めた生い立ちや極めて私的な回想を詳細に記し、ほかにも2人の仲に没頭していたのは女性の方であったかのようにも書いている（文献①）。また、「女性」に言及する際に、場面によってイニシャルを用いたり、また著者なりの思いから「女性」を指して使っているらしいアイヌ語で呼んだりしている。他の詩集でも、同じような表現法を踏襲しており、また近年復刊した詩集の附録では「女性」について実名で語っているため、これらを読み合わせるにより個人が特定できてしまう形になっている。

先述したように、著者は新聞のインタビューの中で、「女性」が自分自身について書かれることを嫌っていたと述べており、そのことは別の文献の中でも書いている（文献③）。

また、「女性」は社会活動に参画していたが、その際に必ずしも民族性を積極的に語っておらず、著者も「女性」がアイヌであると聞いたのは、しばらく経ってからのことであったという。「女性」が残した言葉だけを見れば、出自については取って公言していなかったとも思える。生い立ちなどプライベートな話は、いつ、どこで、誰に、どこまで話すのかはその人なりの基準を持ちその都度考えて決めるものである。その人の属性を、その人自身がどのようにとらえ、自己の人生に位置づけるかも、すべて当人が考えて決めることである。たとえ「女性」から直接聞いたことであっても、ある部分を切り取り、強調し、面識のない不特定多数の人の目に留まる出版物に書いて良いものではない。

著者がなぜ「女性」の出自を書きたかったのかはわからないが、これについては後述する。

著者の他の作品には、直接的な表現ではないが、2人の性的な関係や、「女性」がそれを好んでいたようにほのめかす箇所がある（文献①）。また、「女性」の裸体を想像させるような、身体的特徴を描写した箇所もある（文献③）。

望まぬ形で性的な関係の暴露は、性暴力である。これらを「女性」が目にしていただろうか、今から知ることはできない。しかし、先にみたように、「女性」が自身について書かれることに強い抵抗を示していたこと、にもかかわらずこのような作品が世に出たことは事実である。

3. 「シャモ研究者」批判

文献①では、作中に、しばしば「女性」による一人称語りが続く箇所がある。同じように、歴史上のある「研究者」と「樺太アイヌ女性」の語りもある。この二人は100年以上前の人物であるし、文献①の執筆期には「女性」は亡くなっている。だから、この人々の語っていることがらは、史料や「女性」との対話がもとになっているところもあるとはいえ、著者が考えたものである。

著者は、「研究者」を「心優しいヒューマニスト」として理想的に描いている。また、「樺太アイヌ女性」のことは「研究者」を一途に愛する可憐でけなげな女性とし「彼を愛してしまいましたなぜかはわかりません ただ心が命じたのです」（文献①）と語らせる。

著者は、この2人に自己と「女性」を重ね、そしてそのことを次のように「女性」に語らせる。

「(樺太アイヌ女性)と私は似ていると言われます」（文献①）

この文に続けて、「女性」は自らと「樺太アイヌ女性」との出会いを夢に見、2人の面影や自然の中で暮らした境遇、異民族の男と寄り添っていることなどを重ねて語る。そして、社会運動に加わったことやアイヌとして「目覚めて」いった歩みを述べ、以後もこのような語りが続いていくのだが、これらは全て「女性」を介して著者が語っているものである。その合間に、「女性」が運動の仲間や著者に向けて書いた私信を、著者による「女性の語り」に織り交ぜて引用している。引用符などはないので、良く読まなければ、あたかもすべてが「女性」自身の思いであるかのように読めてしまう。著者と「女性」の間には、長い生活の中で本人達だけが知っていた様々な事情はあろう。ただ、それは本人達の間だけのものであって、一方の思いで公表して良いものではない。また「女性」が実際には話していないことまでを一人称で語らせるのは、別れた「女性」の声を奪い、著者の願望を「女性」に投影して操ろうとしているようにも思える。

著者は、「女性」を同志として捉えていたのであろうが、それは都市部で育ち、高い教育を受けて社会からも一定の敬意を持たれる職に就き、和人であり、男性であるといった自身の特権性に無自覚な状態での「共感」である。このように、2人の関係を一方的に描き、多くの読者に届けることができる点1つをとっても、両者はまったく対等ではない。仮に「女性」が存命であったとしても、同じように出版を通じて反論をすることは難しかったろう。また、著者の言葉の端々に、優越意識やアイヌを異物として捉えていた様子が見えるが、それについては4で述べる。

気になるのは、おそらく著者の言葉として書かれた次の文である。

「シャモの研究者どもよ、あなた方はアイヌの人たちが悲しむからと墓を掘りかえすのをやめたことがあったか」（文献①）

著者は、「研究者」を引き合いに出し、和人の研究者は彼のようなヒューマニストでなければならぬと書いているのだが、このとき著者の立ち位置はどこに置かれているのだろうか。

文献①には、ある和人研究者が、著者の友人であるアイヌ女性から聞き出した話を無断で論文に掲載したとして、痛烈に批判した箇所がある。こうした姿勢を問題視するのであれば「女性」が書いて欲しくないと言っていたことがらを、「女性」の声を使って脚色してまで公表することは問われなくて良いのだろうか。なぜ和人である著者は、自らを「シャモの研究者」から引き離してしまうことができるのだろうか。著者の作品には、このような言説が頻出する。

4. 無理解・見下し・ステレオタイプ

著者が「女性」について語るとき、また「女性」に1人称で語らせるときさえ、アイヌ民族に対する著者の先入観や幻想、願望と蔑視が表れている。

文献①から、そうした箇所をひろってみよう。「女性」が「樺太アイヌ女性」と自分を重ね合わせて語るとき、自分を鷲に「樺太アイヌ女性」を黒ユリにたとえ「生けとし生けるもの」に心を通わせてきたという。著者自身の言葉として「女性」と「樺太アイヌ女性」について書いた箇所では、2人とも「晩年は世に隠れ孤独に静かに去っていった」とし、「女性」が周囲との関係を絶っていたことについては「動物が死期をさすると森の中深くへ消えていくのと同じだった」と述べる。こうした描き方は、著者なりに「女性」たちを好意的に描こうとしたことなのだろう。しかし「女性」に何かの理由があって関係を絶ったとして、その理由をただ女性側の事情に帰することができるのか。また「樺太アイヌ女性」は、世に隠れたのではなく、和人社会から隔離された村に住んでいたものであり、和人社会が一方的に好奇心を向けたり忘れ去ったりしたのだ。こうした事情を汲みず、動物の本能や習性に例えて見せる姿勢は、評者にとっては極めて不快である。

とはいえ、問題はこうした箇所ばかりではない。著者は「女性」に惹かれて行った過程で、女性と結ばれるために自身が家族も職も捨てたことを幾度も振り返る。それは「運命」であり、それによって家族を嘆かせたという。一連の経緯において衝撃を受け、嘆くのは著者ばかりで、「女性」の家族、友人の心情を慮る叙述はない。「女性」を「カルメン」にたとえ、自らは「ドンホセ」のように「ロマならぬアイヌの女を追いかけて」しまった、という一文は象徴的である。カルメンという、被差別民であり、典型的なファム・ファタール（男を誘惑し、身を持ち崩させる女）に例えたのは、相手を一人の人間ではなく、アイヌ・女性という異質で恐ろしい存在ととらえる著者の認識の現れであろう。他の著作では「女性」をトゥスクル（巫術を行うひと）・魔女・セイレーンやオジロワシ、絶滅した狼の落とし子と表現してもいる（文献④）。「彼女は尻尾で自分の足跡を消して彼方に去っ

ていった」とも（文献③）。

他の文献も含めて著者の叙述を読む限り、「女性」に惹かれ、無理を通して周囲の人々を巻き込み、混乱と悲嘆を引き起こしたのは著者自身なのだが、それにも関わらず、自分は「神」や「運命」や「アイヌの女」に翻弄されたのだという陶醉に満ちた言葉が、そこかしこに見えている。「女性」が去ってからも、勝手な思いを語らせて「女性」の声を利用することができるのも、つまるところ相手を対等ではなく、所有物のように見なしていることから起こるのだろう。

一方的な言い分を作品として公表してしまえる特権性、そのことに対する著者の無自覚さ、それを喜んで消費し、アイヌの良き友人として賞賛さえてしまう周囲の感性に、絶望的な気持ちになる。出版に際して、誰か止める者はいなかったのだろうか。

5. 視点の反転

少数者がかかえる悩みにどう応えて良いかわからずに傷つけてしまうことは誰にでもありうることだろう。しかし、長年連れ添う中で、「女性」が書かれることを拒み続けていたことを知りながら書いてしまうことは、わからなかったでは済まない。著者が批判する研究者達が行ってきた侵害にくらべ、著者のしていることは軽いといえるだろうか。

この問題について調べた理由の中で、最も気になっていたことがある。それは、ある詩集の中に、匿名ではあるが「女性」について書かれている章があり、「女性」が生前にその詩集の存在を知り、読んでしまっていたのではないかということだ。評者が「女性」になりかわって代弁することはできないが、もし「女性」側の視点に立てるとするなら、別れた男性によって自身の話を一人称で書かれ、それが文学賞を取り、多くの人に読まれてしまうことで傷ついていたのではないだろうかと感じた。文献①に、「女性」が「晩年は世に隠れ孤独に静かに去っていった」「臨終の時、親しかった者たちにも誰にも教えるなど言い残した」とある。「女性」は、望まぬことが著者によって書かれているにも関わらず、それを賞賛すべき作品のように扱う世間との断絶によって傷つき、かつて親しくしていた友人とも関係を断ってこの世から去っていったように思えるのだが、これは考えすぎだろうか。

著者の作品には「女性」から聞いた生い立ちなどが書かれているが、そこにいるはずの「女性」の存在が感じられない。それは、書かれることそのものが「女性」の意思に反しているだけでなく、多くのレッテルを貼ることにより、一人の人間としての「女性」の姿が見えなくなっているからではないだろうか。

第三者が読めば、匿名でもあり、あからさまな性表現ではないために、問題はないように感じるかもしれない。だからこそ「女性」が書かれる事を嫌だと言っていたと知った上で改めて考えてみてほしい。そして、もし「女性」がそれを読んだらどう思うかを想像してほしい。

著者が関わった活動について書かれた（文献⑥）に「…民族としての自立を押し込んだうえ、ま

ぎれてつつましく生きていくことさえ許さず、身体的特徴をあばき出して見せ物にする……」「このままにしておくことはできない、殺され続けて、死骸までもこずきまわされるような重圧をはねのけない限り、一瞬の生もない、また、その上に安閑と暮らしているシャモとは何ものなのか！」という言葉がある。つつましく生きていた「女性」のプライバシーを暴きだし、死骸までも小突きまわすかのように見せ物にし、それを美談として消費し安閑に暮らす和人とはいったい何者なのだろうか。

6. 「これで良い」と思っているのは誰か

著者が「女性」の意に反していることを充分理解しつつも、「もういいだろう いろいろばらしでも 生きていたら激怒するかも 「私のことは書かないで」と言い続けていたから」（文献③）という著者独自の見解と判断によって「女性」のプライバシーを詩作の題材にしたことを前節まで見てきた。どのような理由があったとしても、本人の了解を経ずに「これで良い」と判断してしまうことは、自己決定の侵害である。そうした、著者の姿は、アイヌ民族の「支援者」を自称する者達に重なっている。本稿での検討をより一般的な問題に接続するために、以下に「支援」と「被支援」の関係から生じやすい問題のいくつかを書き出しておく。

・和人の存在被拘束性

人の思考や言動は、自身の生まれた時、場所、環境（両親の状況も含む）によって、避けがたく拘束され、そこから離れて思考することは不可能である。ただ、マジョリティはそのことに無自覚であり、あるいは自由に振舞って見せることがある。著者が自身の存在被拘束性に無自覚であったことが表れた詩がある（文献①）。「女性」との対話において「女性」が出自を明かしたとき、著者は「そんなことなんでもないよ」と応じた。その応答に対し「女性」は強い怒りをあらわにしている。

著者が「なんでもない」と言ってしまうのは、マイノリティとして困難を経験することがない「だけ」のことで、そのように言ってみせる事には何の意味も無い。このようなとき、発言者は自らの優位性に無自覚なまま、相手の経験の重さを「なんでもない」と言っているのだ。民族性の自覚がないということは、相手を抑圧する立場に属している自覚もないということでもある。こうした発言は二重に相手を踏みにじる。アイヌと和人を、女性と男性に置き換えて見るとそのことが良くわかる。相手を踏みつけつつ「支援者」を気取ることのできる精神に恐怖を感じる。

なお、この詩の内容は、著者の作品に三度にわたって掲載され、二度は著者の目線で、一度は「女性」の目線で書かれている。もっとも新しい掲載時には加筆がされて、表現が細かくなり、著者の意図が補足されている。評者は、加筆部分のうち、著者が自らの言動に触れた次の箇所が気になる。

「このことば（なんでもない：評者注）を一生背負い ひたいに『差別者』という烙印を自分で

捺して 歩かねばならなかった」(文献①)

こうした表現を、著者が自らに対しても厳しい姿勢を貫いている、と受け取る向きもあるようだが、果たしてそうなのだろうか。そうであれば最初の掲載時にはなぜこの言葉が無かったのか。むしろ、烙印という言葉が傷を連想させ、自己憐憫にもつながる印象を与える。「女性」を傷つけたことを書くのなら、ただそう書けばよい。詩という形態を取ったゆえか、著者が自身の傷に陶醉していることが強く表れているように見える。

・一方的「同一化」

マイノリティの運動に参加したマジョリティ男性が、その優位性によって運動の中で支配的に振舞ってしまうことはしばしば耳にする。和人とアイヌの間にもそうした構図はよく見られ、著者と「女性」の関係もそこに重なる部分があるように思える。

多くの場合、アイヌ民族への共感や支援を表明する人々は、社会正義を重んじている自負がある。中でも急進的な者達は、しばしば男性であり、また和人、健常者、異性愛者、都市出身、高学歴、高所得といったマジョリティ性を複数持ち合わせており、かつ往々にしてそのことには無自覚である。さらに、運動については和人／男性／知識層が主導するというストーリーしか思い描けないことがある。そうした者は、初めから自らを救済の主体、アイヌを受動的で庇護される者に見なして疑わなくなる。結果として、相手のアイヌの意思を聞かずに、一方的に連帯を宣言し、納得し、同一化をしようとする。彼らの「アイヌ救済」にアイヌの意思は不要だし、アイヌに連帯を申し出て、それが受け入れられないと見るや憤慨する者もいる。というよりも珍しくないと言える。親しくする相手を選ぶという自己決定さえ、無視されるのである。

このような一方的な思いを出発点とするために、「支援者」の考える連携・共同は初めから不均衡な関係を前提としている。相手に同一化しているようでいて、その実、相手の意思や動向を操作しようとする。さらに、自分には主導的に振舞う力があると自負しているから、自然と上からモノを言うようになる。相手がアイヌでも琉球でも女性でも、自称「支援者」は良く似た振る舞いをする。和人の振る舞いを「マンスプレイニング」(男性が女性に高圧的・指導的にものを言うこと)の変種として「サンスプレイニング」と呼びたい(サンはアイヌ語樺太方言で和人を指す言葉)。

著者は「女性」を理解しようとし、深く共感をしているのかも知れない。しかし、「女性」の目にはどう映っていたのだろうか。一般論として相手を支配し、ときには蹂躪しながらも、連帯していると思ひこむことは可能である。そのような例として第二次大戦期の従軍慰安婦と、戦後日本の学生運動のケースを見る。

従軍慰安婦に対しては、強制的な徴用から戦線における処遇にいたるまで、和人による極めて激しい人権侵害が行われたが、戦後の和人文学の中で彼女たちが描かれることはなく存在しない者と

して無視され続けた。その一方で、わずかに慰安婦をとりあげた作品では、彼女たちを戦場における慰めや、現地の軍の中でも下層の兵士に共感し心を寄せてくれる「戦友」のように理想化して描いている（内藤 2021：206）。兵士達にとっては、自分達もまた下層に置かれ戦争に動員された被害者であるという思いがあり、その点で慰安婦と自らを重ね合わせられたのであろう。しかし、他国に押し入りながら「解放者」を自負する軍に属し、様々に護られた者と、現地で動員され戦後には遺棄され故郷に戻れなかった女性は対等ではない。戦時の追いつめられた状況だけではなく、帰還後にまでも、慰安婦と自らを同じくしいたげられた者を見なし、空想を作品に描くことは、いかにして可能となったのか。それは、自己の特権性に無自覚であり、あるいは様々な事実に目をつぶり、相手の問い返しに耳をふさがぬことには成り立たないのではないか。ところが、そのように都合の良い空想をすることが、慰安婦に寄り添い、情愛をもって描くこととして肯定的に評価されることさえあった（彦坂 1991:89-95）。連帯を装いながら搾取する者と、それを追認する者がいるのである。

学生運動の中に広まった性開放においても、男子学生が女子学生と「連帯」しつつ搾取する構造があったことが語られる（渡辺 1996）。上野・田房（2020）では、そうした運動の内部における状況が直接的に語られている。大学当局との闘争において、運動の中心は男子学生とされ、女子学生は炊事等の補助的役割を当然のように求められていたし、これと並行し「性革命」として、既存の保守的価値観に対抗する1つの表現という装いのもと、性に開放的になることが求められた。その結果としての妊娠や出産、中絶といったリスクは女子学生がほぼ一方的に負わされていたが、男子学生はそうした非対称性に非常に鈍感だったという。一方で、男子学生は女子学生を「闘争的」や「遊び相手」、「奉仕的」などの類型に分け、性的に楽しむ相手のことは「公衆便所」と呼んでいた。そして、恋愛や結婚のパートナーには、身ざれいにして家父長的振る舞いにも合わせられる女性を選んでいたという（上野・田房 2020：58-69）。

男子学生は、ある場面では女子学生を戦友と見なす場面もあったことだろうが、女子学生に奉仕的な活動をさせることを当然視していたし、見下してもいた。そうした不均衡な関係に立った搾取にも無自覚であったろう。そのような雰囲気は、学生運動と連続する様々な社会運動にも広まっていたことが推測できる。私（北原）の母は、関東地方でのアイヌの集まりが始まった時期（80年代前後）を振り返り、「アイヌ解放」を唱え、関東圏のアイヌに接近してくる者の中には、アイヌ女性と見境なしに性的関係を持つととする者がいたと語っている。また、北海道でのある市民運動においても、主導的な立場の和人男性が、アイヌ女性を性的に搾取する事件があったという。

著者は「女性」を「アイヌの女」という枠に入れ、ロマ・カルメンに例えて表現する。著者の文からは「女性」に対する著者の強い執着が感じられるが、一方で「女性」をカルメンに例える点などは、自らの執着を「女性」に投影し、「女性」が著者を籠絡したのだと言わんばかりである。上に見たように、相手を見下し、利用しつつ一方的に共感をしてしまうことは可能であり、それは相手に「寄り添い」、正義の遂行を目指す者によっても引き起こされるのだ。それは著者以外の「支

援者」によっても、繰り返されているように思えてならない。

ここから得られる反省は、なにがしかの運動を行う時、足元の日常にある問題を見落としてはならないということであろう。巨視的な考えも必要ではあるが、大きな話ほど抽象的になり、自らを当事者の立場から引き剥がして先鋭化することが可能になってしまう。私見だが、先鋭化や暴走は、自らは批判されることがないと確信したときに起こる。それに反して、身近な事柄ほど自己に直結するから、たとえ小さな問題であっても正面から向き合ったり謝罪したりすることは難しくなる。「和人として」「男として」謝りたい、などと軽々しく言う者も、自分個人のしたことを「誤りだった」とは、そうそう言わないものである。

・マイノリティの声の選別

著者は、在日朝鮮人の研究者との論争において、「女性」を含む数人のアイヌとの議論を引き合いに出し、より融和的な姿勢を求める発言（トーンポリシング）をしている。アイヌと在日外国人は、和人からの被支配という経験において重なる立場にある。その一方を賞揚し、もう一方に「見習え」と迫ることは、マジョリティ側が自らを批判される立場から遊離させ、あたかも客観的に正しい・あるべきマイノリティを、選別することでもある。このような姿勢は右派・左派のどちらにも見られるもので、マジョリティと対立しない者は良いマイノリティ、自ら意思・主張を持つマイノリティを「例外的・特殊な者」として、声を奪おうとするのである。「これで良い」かどうかを決めるのはマジョリティであり、彼らの意思に同調するマイノリティだけが、発言を聞かれるのだ。

7. 2つの宣言

上で見た問題の克服のため、マジョリティには2つの宣言が求められている。1つは自ら属するマジョリティ集団に対して、もう1つはマイノリティ集団に対しての姿勢の表明である。

社会に属する者は、自らの政治的立場に無関心ではいられても、無関係ではられない。自らが加害者側に属しているとき、強い葛藤が生じたとしても、そこから離脱することはできない。酒井直樹が述べるように、責任を問われる者は、問う者からの「支配・抑圧に加担しているのではないか」という問いかけそのものを拒絶することはできない（酒井2006:178）。ただし、問われることと罪を負っていることは別である。求められるのは、自らが直接的な責任を負っているかどうかを明確にすること、抑圧に加担する者の罪を認め、自らはその者達と立場を同じくしないと宣言することである。

いわゆる「支援者」は、アイヌには容易に接近し、介入し、サンプレイニングをするが、和人集団に対する働きかけはほとんどしない。マジョリティに対し決然とした姿勢表明をすれば、家族や友人や同僚、恩師と対立することになりかねない。それを避けて、マイノリティに向けてのみ支援や反差別を語ることは、自分の特権的な現状を何も変えようとしたくない態度である。こうすれば、

最低限のリスクとコストで最大限の賞賛を得ることができる。何十年もこうした安易な「支援」を続け、自伝めいたものを出し、己がいかにアイヌを救い、いかに感謝されてきたかといった手柄自慢を並べる者もいる。そこでは「アイヌとも分け隔てなく付き合った」ことも手柄に含まれる。人間どうし対等に付き合うという当たり前のことを、手柄めかしてしまう所に彼等の限界が表れている。

「これで良い」と思っているのは誰か。マイノリティは、色々な場面で権利が損なわれ喪失していても、現状を受け入れざるを得ない。その様を見て、アイヌも納得しているとして、現状肯定をしているのはだれか。それは「支援者」自身ではないのか。

このことを明確にするために、自己と他者の境界を意識することの重要性を改めて述べねばならない。もう1つの宣言とは、アイヌに対して、他者として意思を尊重することを表明し、自己がアイヌと同一にはなりえないという（当然の）前提に立ち、相手の意思・人権を実際に承認することである。自他の境界に自覚的に、アイヌへの介入に自制的姿勢・節度を持つこと、自らの行動を「アイヌの為にやっている」と考えたり、アイヌからの評価を期待したりするのではなく、どんなことも、自分のために行うのだと考えること、特定のアイヌと親しくなったことを免罪符として、全てのアイヌに「寄り添っている」かのようなポジションを取ることなく、常に相手からの問いに耳を傾けることである。

おわりに

本稿執筆にあたっては「女性」の遺志を尊重することにできる限りの配慮を心掛けたつもりだが、評者の「女性」に対する配慮にも不足している部分があるかもしれない。「女性」が生きていれば本稿も拒絶されたかもしれない。著者と評者との間には、どこに違いがあるか悩みながら作業を進めた。

評者は「女性」について書くことを目的としていない。ただ、著者が「女性」について書いたことの不当性を指摘する上で、「女性」に触れざるを得なかった。「女性」についての記述が「女性」の意思を無視したまま書かれ、あまつさえ共生のあり方を示しているかのように利用されることへの憤りがあった。もし「女性」がそのことを悲しんで世を去っていったとしたなら、私達もまた「女性」のために何もできなかったことに悲しくなるのだ。

著者と「女性」の私的な関係についてとやかく言う必要があるのか、という反応もあるかも知れないが、著者は私的な関係を公表してしまった。それを和人とアイヌの理想的連帯のように捉える陶醉が、著者にも一部の読者にも感じられるために、評者を含むあらゆる人々も否応なく巻き込まれることとなった。これを放置すれば、著者の「連帯」を追認することになるからだ。

改めて「著者はなぜあれほど「女性」について自由に書くことができたのだろうか」という疑問が深まっていった。相手とのつながりや結びつきに甘んじることなく「これで良い」のかを問い続

けることが、相手を尊重する基本的な姿勢であろう。

文献

- ① 2018 年 ② 2022 年 ③ 2015 年 ④ 2012 年 ⑤ 2022 年 ⑥ 1985 年
⑦ 1976 年 ⑧ 2002 年 ⑨ 2008 年 ⑩ 2020 年 ⑪ 2002 年 ⑫ 2019 年
⑬ 1988 年 ⑭ 1969 年 ⑮ 2002 年 ⑯ 2002 年 ⑰ 2019 年

上野千鶴子・田房永子 2020 『上野先生、フェミニズムについてゼロから教えてください!』大和書房。

酒井直樹 2006 「国民史と国民的責任」『歴史の描き方 1 ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』東京大学出版会。

佐々木俊尚 2012 『「当事者」の時代』光文社。

内藤千珠子 2021 『「アイドルの国」の性暴力』新曜社。

彦坂諦 1991 『男性神話』径書房。

渡辺文恵 1996 「学生運動からウーマンリブへ」『全共闘からリブへ 銃後史ノート戦後篇⑧』インパクト出版会。